特集1

地域をつなぐ、スポーツのチカラ。

ミズノエンジンと大阪市・住之江区がつくる未来

スポーツのチカラ
The Power of Sports

藤井 秀明 氏 Hideaki Fujii
大阪市住之江区 区長
1996年に旧東京三菱銀行（三菱UFJ銀行）に入社後、約28年間銀行員として金融に従事。その後、行政へ転身。民間で培った経営視点と実行力を活かし、地域課題の解決や産官学連携によるまちづくりを推進。スポーツや教育を軸に、企業・学校・住民が協働する地域モデルの構築に力を注ぐ。

佐藤 夏樹 氏 Natsuki Sato
ミズノ株式会社 グローバル開発本部 部長※
1997年にミズノ株式会社に入社。シューズ開発を中心にキャリアを重ね、イノベーションセンター「MIZUNO ENGINE」の設立にコアメンバーとして参画。世界市場を視野に「はかる・つくる・ためす」の開発体制を築き、共創で社会課題に挑む文化を企業内外に広げている。
※所属・肩書は取材当時

大阪市・住之江区にある「ミズノエンジン」は、ミズノ株式会社のミズノミライビジョンを実現するために生まれた新たな研究開発拠点。その役割は、研究・開発にとどまらない。地域と交わり、教育に踏み出し、社会課題とつながる“開かれた場所”だ。今回の対談では、同拠点設立時にコアメンバーとして参画した佐藤氏と、官民連携を実践する大阪市住之江区長の藤井氏が、ミズノエンジンのコンセプトと地域共生のあり方について語り合った。

MIZUNO × 大阪市 住之江区

ミズノエンジンの紹介はこちら

「はかる・つくる・ためす」、そして「交わる」へ

ミズノエンジン設立の経緯とコンセプト、狙いを教えてください

佐藤氏　ミズノエンジンは、「次の100年のものづくり」を模索する中で生まれました。私たちは「ミズノミライビジョン」を掲げて、今後どんな社会に貢献していくのかを見直し、「スポーツ」を〝楽しく体を動かすこと〟と再定義しました。その上で、「教育・健康・競技・ワーク・環境」という5つのテーマを設定し、開発の領域を広げています。

それを実現するために必要だったのが、アイデアを「はかる・つくる・ためす」ことができる、迅速なプロトタイピング環境です。海外の工場で試作すると何週間もの時間がかかっていましたが、ここでは1日で測定から製作・検証までを回すことができます。

また、もうひとつの大きな特徴が「開かれた場」であることです。ミズノエンジンでは「オープンで化学反応」というキーワードを掲げ、社員だけでなく、教育関係者や行政、地域の高校生など、異なる立場の人々が交差する空間を目指しました。

開発拠点であるにもかかわらず、一般の方々や学生を受け入れる柔らかさを持っている。ここで得られた気づきやアイデアが、社内外を問わず循環するような「場」を育てていきたいと思っています。

企業と地域、交ざり合う場の可能性

藤井氏　私は銀行出身で、行政の仕組みに精通してきたわけではありません。その分、民間のスピード感や柔軟さ、ホスピタリティを大切にしています。私が子どもの頃に父親に買ってもらった野球グローブが、ミズノさんの製品でした。その思い出のミズノさんが、自分の勤務する住之江区に本社を構えていることに、特別な縁を感じました。このミズノエンジンに初めて伺ったとき、施設が地域に対してとても「開かれている」ことに驚きました。企業の研究施設といえば一般には閉ざされた印象がありますが、ここは高校生や地域の方々も見学に訪れるオープンな雰囲気がありました。

「エンジン」という名前にも、「推進力」と、「円陣を組む」という意味が込められていると聞いて、非常に共感しました。企業の現場と地域の課題が自然に交わる。そんな空気を、現場の空間設計そのものから感じました。

ミズノエンジンには、ミズノの研究開発の基本となる「はかる・つくる・ためす」ための特殊設備が集結している

行政としても、こうした先進的な取り組みをどう地域に還元するかが課題になります。見学に来た高校生が「ここで働いてみたい」と思ってくれたら、まちの価値も高まる。企業の姿勢と地域の目線をつなげていく動きを、今後さらに仕掛けていきたいです。

スポーツは人と人をつなぐ共通言語

ミズノは、「スポーツで人を幸せにする」という研究開発ビジョンを掲げていますが、具体的にはどのような取り組みをされていますか？

佐藤氏　スポーツはこれまで、主に「競技」という側面で語られてきました。しかし私たちは、それだけではなく、もっと広く捉える必要があると考えています。誰もが楽しんで体を動かすこと。それが健康づくりや教育、福祉、環境など、社会全体に広がっていく力になる。

たとえば、住之江区と連携して実施した高齢者の歩行測定も、そのひとつです。歩行速度や安定性を計測することで、転倒予防や、地域での移動手段、さらには防災時の避難に至るまで、さまざまな文脈に活用できます。これはまさに、「スポーツ」の視点から社会課題にアプローチしている事例だと思います。

藤井氏　住之江区は、津波リスクが高い地域です。避難に時間がかかる高齢者にとって、「歩けるかどうか」は命に直結します。そのため、住民の歩行能力を数値化するというミズノさんの取り組みは、防災対策としても非常に意義があります。

「スポーツ」を通じて、行政と企業、あるいは地域と企業の間に会話が生まれやすくなる。年齢や職業、立場の異なる人々が、同じ土俵で語れる。そうした意味でも、スポーツは非常に有効な「共通言語」になっていると感じます。

地域イベントや防災訓練でも「体を動かす」ことを軸にすれば、参加者の垣根が低くなり、互いの顔が見える関係性が生まれる。そうした事例を少しずつ積み上げながら、まち全体を、スポーツを通じてつないでいきたいと思っています。

学びの場に広がるSTEAMSの可能性

佐藤氏　いま私たちは、「STEAM教育」に「Sports」を加えた「STEAMS（スティームス）」という概念に共感しています。これは、科学・技術・工学・芸術・数学に、体を使った学び＝スポーツを加えることで、より実践的かつ協調的な学びを育てるというものです。

スポーツを通じて、思考力や自己効力感、人間力を育む。転んでも立ち上がる、ぶつかっても話し合う。そうした身体的な経験が、子どもたちに「自分はできる」という感覚を与えていきます。私たちはこの考え方を、単なる理念で

MIZUNO × 大阪市 住之江区

はなく製品開発や教育支援プログラムにも落とし込むことで、自ら考え、他者と協力しながら課題に取り組む力を持つ人が、社会にもっと増えていくことを期待しています。

藤井氏　教育という観点では、学校での体育の授業は伸びしろがあると思っています。勝ち負けや体を鍛えるというだけでなく、「体を動かすことを楽しむ」といった視点が自然と組み込まれることが理想です。行政としても、そうした学びのフィールドを広げていきたいと考えています。

超高齢化社会のために「歩く・立つ・手を伸ばす」

高齢化が進むこれからの社会に向けて、ミズノエンジンではどのような取り組みを構想されていますか？

佐藤氏　ミズノでは人工筋肉など「人間拡張技術」にも注力しています。日本が超高齢化社会を迎えている中で、健康寿命の延伸が最大のテーマになっています。スポーツ用品メーカーの技術を活かして、高齢者や障がいのある方が「いつまでも自分の力でイキイキと動ける社会」の実現を目指しています。これはスポーツだけでなく、福祉や医療の現場にもつながっていくテーマです。日本の超高齢化社会は、今後は他の国も経験することになると考えられるので、今のうちに研究開発することが大切だと思っています。

今は競技パフォーマンスの向上だけでなく、「歩く・立つ・手を伸ばす」といった日常動作を支援するフェーズに入りつつあります。人の動きを支える技術を、誰のために、どんな社会に向けて開発するのか。その問いを、私たちは常に中心に据えています。

藤井氏　こうした教育や、新たな技術の研究開発といった動きは、行政だけでも、一部の学校・企業だけでも限界があります。私の仕事は「人と人をつなぐこと」。住之江区以外の他自治体と共同してできること、企業を巻き込んで初めて動くことも多いので、お互いがウィン

人とスポーツ

People and Sports

特集2 スポーツ×人・企業・商品

スポーツのチカラが生み出す新たな価値

スポーツの価値や活用領域は、イベントやスタジアム整備にとどまらず、観光、文化、教育といった領域へも広がりを見せている。こうした動きの根底には、スポーツを「人と地域、企業と行政を結ぶ共通の舞台装置」として捉える視点がある。
その実像と可能性について、大阪産業大学 田中教授に話を聞いた。

田中 彰 氏 Akira Tanaka

大阪産業大学
経営学部 教授

大阪産業大学経営学部教授。iCLコアメンバー。朝日放送株式会社にてスポーツ局および編成局での勤務を経て現職。専門はスポーツマーケティング・地域活性化マーケティング。大阪産業大学のキャリアセンター長も兼務し、瀬田漕艇倶楽部の代表理事と滋賀県ボート協会常任理事も務める。

MIZUNO × 大阪市 住之江区

ウィンの関係になれるように「つなぐ」ことに注力したいと考えています。そうした面で、ミズノさんのような存在は非常に心強く、アイデアが尽きません。

未来へ。大阪・関西万博が残すもの

藤井氏　私は、今回の万博を「ソフトレガシー」として捉えたいと考えています。建物などのハードレガシーだけではなく、人と人とのつながりや人流、そして、地域同士の関係性こそが、未来に残るべきものだと思っています。

ミズノさんとは、2025年の6月に住之江区とパートナーシップ協定を締結しました。こうした関係性の積み重ねが、まさに未来へ語り継がれるレガシーになると考えています。自治体間の連携や修学旅行の新しい形など、じわじわと波及効果も見えはじめています。今後は、住之江区が他自治体とのハブとなり、教育や福祉を横断した連携の拠点となることも見据えています。

佐藤氏　私たちが目指しているのは、「体を動かすことが楽しい」と子どもたちが感じられる社会。そして、高齢になってもその気持ちを持ち続けられる環境です。その実現には、技術の進化だけでなく、行政や企業、子どもから高齢者まで、あらゆる人が関われる仕組みづくりが欠かせません。人と人が円陣を組むように支え合い、つながり合うことで、ミズノエンジンは未来に向けて動き出していきます。ここ住之江区から、その一歩を確かに踏み出していきたいと考えています。

ミズノエンジンでの対談をありがとうございました。

対談を受けて

スポーツは、人と企業、地域をゆるやかにつなぎ、社会課題への実践的なアプローチを可能にする存在である。今回の対談で見えてきたのは、ミズノエンジンという開かれた場が、技術と人の知見を交差させ、新たな価値と変化を創造する拠点となっている姿である。行政と企業がフラットに連携し、教育、防災、福祉といった分野を越えて協働することで、スポーツは共通言語としての力を強めている。身体的な力にとどまらず、思考と対話、そして物語を生む力としてのスポーツが、地域社会に着実な変化をもたらしている。その変化の連なりが、次の時代に向けた持続可能な社会の芽を育んでいるのだと思う。

ファシリテーター
森本 公幸
（もりもと まさゆき）
株式会社ハル
執行役員・
ブランディング
ディレクター

1990年奈良県出身。関西外国語大学卒業後、新卒で美容メーカー入社。サロンへの営業兼講師として従事したあとに、2015年に株式会社ハルに入社。現在はSP本部第1部・部長としてチームをマネジメントするとともに、企画営業としてさまざまなお客様に携わる。